

ちょっとした意地悪のつもりだった。

遅刻してきた一樹が「お詫びになんでもする」と口を滑らせたものだから、さして怒ってもいなかった雫もなにか言わなくてはならなくなった。

ふと思いついて、雫は一樹を水の流れる階段——カスケードの前まで連れていった。

「わたしのいいところ言ってよ」

「え、そんなんでいいの？」

「この階段の数だけね」

一樹はカスケードに目を転じた。しまった、という後悔を彼の目に見てとった雫は「軽口注意」と釘を差して終わるつもりだった。

ところが、「いいよ」と一樹が胸を張った。

「言うよ、言えるよ、あたりまえだろ。目がきれい」

言葉と同時に階段をひとつあがり、間髪入れず二段目に足をかけた。

「耳の形もきれい」

「手抜きじゃん」と雫は彼の背中を小突いた。

「俺を待っていてくれる」また一段あがった。「失敗しても笑ってくれる」ひとつ言うごとに一段あがる。「いつも前向き。俺のこと頼ってくれる。叱ってくれる。俺も頼らせてもらってる。いっしょにいたいって思わせてくれる。いっしょにいてくれる」

雫は一樹に抱きついた。一樹は足を止めた。

「まだまだあるよ」と言われ、雫は「聞きたくない」と返した。

「そんな急いでぜんぶ言わないで」

「じゃあ毎年ひとつプレゼントとして伝える。何十年分が残ってるけど、いい？」

雫はまた彼の腕を小突いて「意地悪」と言った。

Precious Time with Lover

Message
